

## 2. 分科会の概要（文化）

テーマ	文化
参加者	日本青年7名、外国青年12名
トピック	互いの国の文化の共通点、相違点について
成果	<p><b>1. ドミニカ共和国での現状</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・家族の人数（家族と認識している範囲の人数）はかなり多く、頻繁に集まっている。</li><li>・ダンスの文化は非常に身近で、家族や親戚の集まりなどでも食事後に踊るのが通例。</li><li>・家族とのつながりが強いため、恋人との時間と同じように家族と過ごす時間をつくるよう努める。</li><li>・日曜日は家族と過ごす時間としてとらえられている。</li><li>・伝統的な料理の作り方は年上の人々から伝えられるが、スーパーなどで手に入る簡単で安い料理に移りつつある。</li><li>・3世代で一つの家に住んでいることが多い。そうでなくても、近所に住んでいることがほとんど。</li><li>・若い世代はアメリカ文化をより好む人も多い。それは音楽などにも言え、ラテンミュージックよりもアメリカから入ってくるミュージックを好む若者は近年非常に多い。</li></ul> <p><b>2. 日本での現状</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・家族は基本的に核家族で、繋がりはドミニカ共和国ほど強くない。</li><li>・家族や親戚が集まるのは年に一回ほどで、ごく稀。集まりがあるときは、お正月や法事など宗教的行事があるときのみ。</li><li>・伝統的な日本料理を作れる人はどんどん減っており、若い世代に伝承されずに消えつつある。</li><li>・働く女性が増えているが、社会の仕組みや制度によって、結婚や子供を持つこと自体が大変であり、家族を持たないことも多い。</li><li>・宗教的行事は年間を通してあるが、その意味をしっかりと理解している人は非常に少なく、宗教観も日本人は基本的には持っていない。</li></ul> <p><b>3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・家族との繋がりが強いのは、女性の社会進出に向けても非常に大切。例えば、ドミニカ共和国では母親が働いている間、親戚がその子供を見ていてくれることが多い。日本でも、もう一度家族の重要性について考え直すべきだ。</li><li>・食文化などはグローバル化が進むにつれ、自国のものが減少してしまう傾向があるため、伝承していくことの大切さを再認識し、教育を行っていくべきだ。</li></ul> <p><b>4. 発表の内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本とドミニカ共和国との文化の違いは多くあるが、その中でも共通点もまた多くあることがわかった。</li><li>・文化について普段深く考えることは少ないが、このような機会を通して自国の文化を他国と比較して再認識することは重要だ。</li></ul>

## 文化グループ感想

島田 夏海

ディスカッションが実施されたのは、訪問国でのスケジュールの後半で、ドミニカの文化について少しずつ理解してきたと感じたころだった。このディスカッションを通して私たちと同じ世代の大学生と話すことで、より深いドミニカ共和国への知識を得ることができた。

例えば、ドミニカ共和国の特徴的な文化の一つに挙げられるのが、家族の形である。家族の人数は平均で何人か？という質問に対し、彼らは答えに困り、その理由として、家族で頻繁に催すパーティーには多くの家族（親戚）が来るが、そのどこまでを家族というか考えてみたことがなかったと言っていた。彼らは家族とのつながりが強く、共に過ごす時間も日本と比べてとても長い。それは働き方やライフスタイルにも影響しており、家族との時間を増やすための工夫や考え方は日本と全く違った。ディスカッション前、幾人かのドミニカ共和国人から家族の大切さについて話を聞いていたものの、それを実際に同世代の若者たちから聞くことで、より身近な話題

として考え、日本人としてドミニカ共和国を見習って、日本の社会に生かしていけるアイデアを多く学ぶことができた。また、このディスカッションを通して、全く違うバックグラウンドを持つ者同士でも、互いに理解し合い、考えをまとめられるのだということを知った。ディスカッションを開始した際、日本人はあまり話さず、ドミニカ共和国人が自分の国についてかなりの時間をかけて説明するという状況が続いていた。しかし、その状況を指摘し合い、理解し合おうとすることによって、日本人はより積極的に話すこと、ドミニカ共和国人は話を聞くことを意識し、ディスカッションを円滑に進めることができた。このことは、今回のようにドミニカ共和国と日本の間だけではなく、他の多くの国々にも通じることだと思う。偏見や政治的影響によって、互いに牽制し合い、寄り添おうとしない国は多いが、一人一人と話してみることで新しい理解が生まれ、関係を深めていけると考える。

